

雑事記(37) 三編

盛丘 由樹年

1 「文学エッセイ」

笑う赤猪子

赤猪子あかいこの説話は、古事記に典故があり、ほとんど神話として語られている。それを題材に有吉佐和子がき

め細かい描写を加え、短編詩小説『赤猪子物語』として仕上げ、1957年4月に「新女苑」で発表した。

その後、選集された「昭和名作短編小説1946〜1980」新潮社版昭和63年(1988)5月発行のものをおもしく読んで、それを私はたまたま手に入れ、それをおもしろく読んだので、紹介したい。

この小説では、赤猪子16歳、若建わかたけるのみこと命33歳のときの最初の二人の出会いと、80年後の宮廷での会見の場面を中心に詳細に書いている。物語は、宮廷での会見から語られ始め、赤猪子が80年前を回想する形で進められる。

ここでは時系列に合わせ、概要を以下に示そう。

5世紀後半、ヤマト国・引田部ひきたべの山間で、ある初夏の日、若い娘の赤猪子は、泊瀬川で白い布を洗ってい

た。そこへ狩猟姿の壮年の男が赤猪子の前に走り出た。獲物(猪か鹿)を追ってきたが、男は瞬間的に美貌の赤猪子に関心を示した。

「おまえは誰の子か」と尋ねた。

「わたしの名は引田部の赤猪子といます」と、赤猪子は自分の名を名乗る。

男は、女の名を尋ねたわけではなかったが、聞いたですこともなく、狩の最中だったことを思い出し、

「おまえは嫁よめかずにいる、召さむぞ」と言い残し、その場を立ち去った。

つまり、瞬間的な出会いの際に、わずかな言葉のやり取りをしただけで「おまえは嫁に行くな、わしがもらいうけるぞ」と命令し、強引に結婚を決めたわけだ。

「おまえはわしのものだ」と宣言したようなものだ。その女に許婚があるうとなかろうと、ぜんぜんかまわないのだから、かなりそそっかしい。

赤猪子にしても、古代において男に問いかけられて自分の名を名乗ることは、求婚を承諾した意味にとられてしまうことを知っていたのだろうか。(現代でメ

ールアドレスを教えるようなことだろう)

赤猪子は、後からかけて来た従者たちに男が姿を消した方向を教える代わりに、男が誰だったかを知ることができた。男の正体は、若建命(雄略天皇・オオハツセノワカタケノミコト)だった。国全体を統治する帝みかどだったわけで、庶民にとつては偉大すぎる高貴な人物だった。その言葉にそむけないとしても、赤猪子に異存はなかった。立派なひげをつけた顔立ちといい、筋肉質のたくましさといい、強い男にみえた。りりしい姿、自信あふれる言葉の響きにリーダーシップを感じ、胸のときめきを覚えた。理想的な男の姿として目に映った、猛々しい一面もあったといううわさを聞いてはいたが、気にならなかった。

しかし「召す」といいながら、いつまでたっても、宮廷から声がかからなかった。それでも赤猪子は待った。

赤猪子は始めの一、二年は帝の言葉を信じていたが、そのうち、帝の「気まぐれ」と気づいた。帝にとつては、気にも留めないような、軽い発言だったことになる。召そうという意思がなくなつたと解釈してよいのだ。それは一方的な言い分だったし、「嫁よめかずにいる」ということに赤猪子が承諾の返事をしたわけでもない。

赤猪子は美貌の乙女だったから、言い寄る男たちは多数いたが、赤猪子の心がなびくことはなかった。いや、なびくことがあつても、若建命のりりしいイメージを思い浮かべると、身を任せる決断できなかった。どうしても若建命と較べてしまう。赤猪子の心には理想像が形作られていた。それに打ち勝つような人物は現れなかった。

赤猪子は白布を織る仕事をすることで生計を立てた。80年が過ぎたとき、余剰の白布を宮廷に献上することを思いついた。宮廷に出向き、帝にお目通りすることがなかった。

このとき赤猪子96歳、若建命113歳。もう赤猪子の姿は、老婆そのもので、枯れ木のようにだった。赤猪子は遠い昔の出会いのことを話したが、帝は思い出すことができなかった。けれども、思い当ることがあつたのだろう。帝は「召そう」と言ったことをうっかり忘れたことを認めた。帝が、赤猪子の一途な思いに感心しながらも、その老いた姿を見やつて、詠んだ歌。

引田ひきたの若来わかくるすばら栖原 若くへに 率いね寝ねてましもの 老いにけるかも

これを私が意識すると、〈引田に、若い栗の木のような若い女がいれば、おれは抱いて寝るけれど、老いてしまった女ではなあ……〉

それを聞いて、赤猪子が笑い出す。帝の前で笑うとは無礼なことだが、耳の遠い帝にはよく聞こえない。

赤猪子の忍び笑いが続いた、袖で顔を隠しながら……。

この笑いが小説のオチになっている。有吉佐和子は、笑ったわけを解説しているけれど、私が余計に補足すれば、そのおかしさは、「わたしが老いたことを理由にして抱けないと言っているが、自分が老いたから抱けないからでしょ。足腰も立たないような自分のことを棚に上げて、よく言うよ」ということなのだ。長年、壮健な男のイメージを抱き続けていた自分自身に対しても、笑い飛ばしてしまっていた。

この歌は、〈相手の女が老いているから、抱けない〉と解釈するだけでなく、〈自分が老いているから、抱けない〉とも解釈できそうだ。いずれにせよ、言い訳がましくて、おかしい。

なお、古事記の原文では、赤猪子は帝の思いやる言葉と歌に感激し、涙で袖を濡らしたと記述している。

そして文節の末尾に、赤猪子は過分な返礼品をもらい、退廷したとある。

赤猪子は泣いていたとしている。袖で顔を隠していたのだから、周囲の者には、泣いていたのか笑っていたのかは、わからないから、そう見えたのだろうが、有吉佐和子は「笑っていた」と解釈した。赤猪子の心情をよく理解し、達観している。なお、有吉佐和子の『赤猪子物語』の原題は『笑う赤猪子』だったという。

ふと、私が考えると、引田部には赤猪子という名の女が複数いて、召されたのは別の女だったりして……。

若建命がそれに気づかず抱いていたとするなら、つじつまが合いそうだ。おそらく宮中は暗くて、相手の顔などわかりやしない。

でも、同じ地区の赤猪子という女が帝に召されたという事実があれば、すぐに当の赤猪子にも伝わるはずだから、彼女は間違いに気づいてしまうだろう。この仮説は成立しそうにない。

やはり、若建命は当日、遠出をし、野山を駆け巡ったから、宮廷に戻ったとき、そうとうに疲れていたはずであり、瞬間的に出会った女のことなど忘れて、その晩は早々に寝てしまった、という可能性が高い。

2 「歴史エッセイ」

鍵屋の辻

「伊賀越えの敵討」は日本三大敵討（仇討ち）の一つとして数えられる。他の二つは「忠臣蔵」と「曾我兄弟」（この代わりに「浄瑠璃坂」を入れる説もある）。この事件について「NHK歴史への招待」*1が真相に迫っているのので、私は推察を加え、その概要をまとめてみたい。

事件は江戸時代1634年（寛永11）に起きたものであり、そこでの奮闘ぶりが目立つた荒木又右衛門が一躍ヒーローとして、その時代の人々に喝采された。近年になっても、それが講談や時代劇の映画で誇張を含んで脚色されたから、彼はさらに伝説的なヒーローとして語り継がれる。その血闘の現場は現存し、「鍵屋の辻」は史跡として石碑が建てられている。

敵討を果たしたけれど、その後の彼は冷遇され、4年後に急死したから、この敵討の場合でも悲劇的な結末になっている。彼はこれに関わったことを後悔していたかもしれない。

この敵討は、正当性に疑問が持たれる。弟の仇では、動機としての根拠が弱いし（名分としての忠孝に当て

はまらない）、集団的な襲撃事件であるから、治安を維持したい幕府としても、その処遇に迷ったことだろう。

・発端・備前岡山藩での殺傷事件

4年前の1630年（寛永7）備前岡山藩の城下で、盆踊りの夜に若者二人が争い、一方が斬殺された。ともに岡山藩の武士であり、同僚だった。殺されたのは渡辺源太夫17歳、殺したのが河井又五郎19歳だった。

何がきっかけで争いになったのか不明だが、渡辺源太夫が河井又五郎を激怒させたのだ。武士の体面を著しく傷つけたから、と考えられる。

渡辺家は、大きな屋敷を持っていたほど格式が高く、もともと旗本の家柄だった河井家の又五郎を見くびっていた。つまり、岡山藩においては、河井家はよそ者だったのだろう。

事件が起きたのは盆踊りの夜だったから、酒を飲んでいて、ハメをはずしたのかもしれない。

渡辺源太夫は藩主池田忠雄に寵愛されていた美少年だったことから、トラの威を借るキツネのような振舞いをしたのかもしれない。渡辺源太夫が河井又五郎

より年下にもかかわらず、傲慢な態度で侮蔑的な言動をした、と私は推察する。

・河井又五郎 (1610～1634)

そうだとしても、殺した側は厳罰を免れない。河井又五郎は、藩主から単に叱責をうけるだけではなく、手打ちにされる恐れもあった。逃亡を企て、江戸の旗本屋敷に逃げ込んだ。

身内の旗本のところで、事情を説明したことだろう。話を聞いた旗本たちは、

「そうか、そこまで愚弄されたら、武士として刀を抜かざるを得まい」などと納得したから、河井又五郎をかばったのだろう。

「しかし、相手が悪いぞ、渡辺家はともかく、池田の藩主が黙っていそうにないな。けれど、この江戸の旗本屋敷にいれば、手出しはできんだろ」

河井又五郎は旗本たちの支援を受けた。その後結局、諸国を巡ることになるが、河井一族を中心にして身辺を固め、警護に怠りなかった。

・岡山藩主池田忠雄

この事件で激怒したのが、備前岡山藩主・池田忠雄だ。寵愛していた渡辺源太夫が殺されたのだから、怒りまくった。河井又五郎が逃げ込んだ旗本に対し、身

柄の引渡しを強く要求した。しかし、旗本側はそれに反発し、応じなかった。

当時、もともと大名と旗本の対立があった。1615年の大坂夏の陣が終わってから、世の中は太平になり、戦闘集団としての旗本の存在感が薄れ、弱体化していた。武人から文人への転換が求められていた時代だった。大名の管理下に置かれた旗本たちの一部に、その処遇に不満が生じたのだろう。そんな人たちの中には、文人としての仕事（読み・書き・そろばんが必要）ができず、年下の同僚にバカにされた人がいたりして……。

旗本はこれを一つのきっかけとして態度を硬化させた。一大名と旗本のもめごとが、さらに周囲の有力者たちがそれぞれの方に肩入れをしたりしたから、大きな対立構図になってきた。それを憂慮した幕府（老中松平伊豆守が主導）は、こじれた関係の、反目しあう両者を処罰する形で、幕引きを図った。それは次の処分内容だった。

関係した旗本は、百か日の寺預かり

又五郎は江戸追放

池田藩は岡山から鳥取へ国替え

ケンカ両成敗だった。池田忠雄にとって不本意な裁定となった。大名としての面子もつぶされ、実質的に格下げにされた。被害者が罰せられたようなものだから、幕府に文句の一つも言いたいところだが、それはできないから、矛先が又五郎に向けられた。

「旗本あたりは、ろくな仕事をしないのに、気位だけは高い。すべてはあいつのせいだ。おのれ、生かしておかぬぞ」と思ったに違いない。

池田忠雄は、国替えになった鳥取の地で病に倒れた。1632年のことだ。（幕府によって毒を盛られたという説もある。幕府の裁定に不服を唱えていたのだからか）

その病床で、家来たちに「たとえ備前一国に代えても、又五郎を旗本の手から奪い取り、その首をわが墓前に供えよ」との遺言を残した。又五郎の暗殺に関してそうとうに強いこだわりを示した。

だれよりも河井又五郎を討ちたかったのは、藩主だったわけで、それが死亡したけれど、遺言として残したのだから、藩として何もしないわけにはいかない。

しかし、幕府ににらまれては、もう藩として動くわけには行かなかった。渡辺家にその任を押し付けた。実際に行動したのが、渡辺源太夫の兄・渡辺数馬だっ

た。

「オヌシも武士なら、弟の敵討ちをやってみろ！ 資金をやるから、脱藩しろ。オヌシが河井又五郎を討つまでは、藩に戻ることはあいならん。ただし、討ち果たしたら、出世の道も開けようぞ！」と上司に言われたはずだ。

・渡辺数馬

渡辺数馬は、鳥取には行かず、その上意（藩の命令）によって河井又五郎の命を狙ったわけだが、渡辺数馬は、それ命令にいやいや（しぶしぶ）従ったのだろう。数馬自身、武芸を得意としているわけではなかった。

一般的に幕府政権下では、そんな殺人は許されないことだろう。敵討は、主君や親が殺された場合に、その敵を討つことは許可されるが、この場合、弟だから、非公認の敵討となる。藩の命令による殺害行為なのだ。下手をすると、返り討ちにあつて、自分が死ぬ危険があった。又五郎が江戸から追放になった後は、どこへ行つたか、わかりやしないから、探すだけで大変だ。

「愚弟のために、何でオレが苦勞しなければならんだ」と、不満を漏らしたところだろう。

一人で行動するのは無理だった。腕の立つ者に助太

刀を頼むしかなかった。大和郡山やまとこおりやまに、それにふさわしい男がいた。数馬は頼み込みに行った。おそらく報酬をちらつかせて……。

・荒木又右衛門 (1599～1638)

荒木又右衛門の経歴は、情報によると、伊賀出身で、服部平左衛門の二男として伊賀国服部郷荒木村(現、三重県伊賀市)に生まれた。父の服部平左衛門はもと藤堂家につかえ、浪人後、岡山藩池田家の家臣になっていた。

又右衛門は、12歳で桑名藩士・服部平兵衛の養子となり、養父のもとで中条流の剣術をならう。のち、養家を去って、郷里の伊賀にもどり、荒木と改名する。剣術の腕前をみこまれ、29歳で大和郡山藩に剣術師範として招かれたとある。剣術師範を務めるぐらいだから、腕の立つ人だった。伊賀の服部一族の出身だったというから、又右衛門にも忍者としての資質や素養があったのだろう。

荒木の妻が、渡辺数馬の姉だった。つまり、荒木の妻、渡辺数馬、渡辺源太夫の三人は、姉・兄・弟という関係になる。荒木は渡辺数馬に依頼されて助太刀したと言われているが、荒木の妻にとっても、河井又五郎は「弟の敵」であり、彼自身も「義弟の敵」として

河井又五郎を討つ動機が生じていた。荒木又右衛門としては、妻と渡辺数馬の双方から強く請われて、助太刀を断るわけには行かなかったようだ。また、雇われて、その任に赴くフリーランスの武芸者としての一面もある。つまり報酬を目当てにする人だったことが伺える。

・激闘6時間

1年8カ月がたったとき、河井又五郎一行が伊賀越えをするという情報が、荒木又右衛門らにもたらされた。忍者仲間特有の情報網を駆使したのかもしれない。伊賀忍者の元締めだった藤堂家の差し金があったとも言われている。事前にわかったから、準備万端の計画がたてられた。

荒木又右衛門ら4人は伊賀の「鍵屋かぎやの辻つじ」で待ち伏せすることにした。鍵屋の辻は、伊賀上野の城下に通じる西の出入り口に当たっていた。ここは荒木又右衛門の地元であり、地の利があったから、絶好の場所になる。街道がつながる三叉路であり、二方向のどちらから来ても、通る地点だった。今の三重県伊賀市の町外れにあり、伊賀上野城から西の1kmほどのところには、その名の付いた史跡公園がある。

奈良方面からやってきた彼の一行は、ここで右に曲

がるはずだった。道の両側に、万屋と鍵屋という茶店が二軒あった。それぞれの茶店の後ろ側に隠れて、渡辺数馬と荒木又右衛門、荒木の門人二人・岡本武右衛門と岩本孫右衛門の4人は二手に分かれ、「戦鬪服」に身を固めて待ち構えていた。相手方の人員構成も把握できていたはずだが、この4人で、相手方がいくら多人数であろうと、勝算があったのだろう。

4人がしばらく身を伏せて待つうちに、11月7日午前8時、武士の一団が、馬のひづめ音とともに、濃霧の中から姿を現した。情報どおり、河井又五郎一行に間違いなかった。主だった者は馬に乗っていた。総勢11人。

河井又五郎としても自分の命が狙われ続けていることを知っており、用心していた。この旅程では、河井一族の強者たちが同行していた。中でも、用心棒的な男は二人、河井甚右衛門と桜井米兵衛だった。

河井甚右衛門は、荒木又右衛門と同じ、大和郡山藩の剣道指南をしていた剣豪だった。河井又五郎の伯父に当たる。桜井米兵衛は槍の名手として知られていた。

河井又五郎の妹婿であり、義弟に当たる。今般、本業から離れ、河井又五郎の警護役を引き受けていた。一族の結束の強さが伺える。

一団が鍵屋の辻を通りかかった。でも4人は、すぐには動かなかった。

そこを過ぎようとしたとき、荒木又右衛門が足音を忍ばせて、後ろから追いかけるように、躍り出た。この瞬間から、激鬪が始まった。無言で、列の最後尾を行く馬上の侍の左半身に斬り付けた。荒木又右衛門はこの侍とは顔見知りだった。同じ大和郡山藩の剣道指南役を務めていた男だったから、同僚だった。ライブル意識を持っていたかもしれない。

河井甚右衛門は、この一撃を受けて落馬した。刀を抜くひまもなく、座り込んだまま、荒木に向かって、手で制するように右手を伸ばした。しかし、荒木は、それにかまわず、振りかぶった刀を甚右衛門の額に打ちつけた。さらに三、四の太刀を浴びせたから、甚右衛門は無抵抗のまま絶命した。

荒木の二人の門人・岡本武右衛門と岩本孫右衛門は、桜井米兵衛の槍持ち三助に襲いかかり、これを斬り倒した。桜井米兵衛に得意の槍を持たせない作戦を取った。

「槍をもて！」と桜井米兵衛が叫ぶが、届かなかった。桜井米兵衛は槍を持たなかったが、その下人・八左衛門とともに、刀を抜いて反撃に出た。

そこへ荒木が加わったが、桜井米兵衛の鋭い打ち込みを荒木が刀で受けたとたん、その刀は「バキン」と折れてしまった。荒木はあわてて、折れた刀を桜井に投げつけると、退いた。

荒木が持っていた刀は、安物だった。後日、荒木は、剣術の心得のある者からそれを指摘されたとき、恥じたとされる。荒木にも後悔するところがあつた。質実な生活をしてきた荒木は、高級な刀を入手しなかつたとみえる。

「刀がなくては戦えない！」でも、すぐにひらめいたのが、河井甚右衛門の刀だった。横たわつた河井のもとに走り寄り、その刀を奪つた。

桜井米兵衛は、荒木を追いかけようとしたが、門弟の二人に阻まれた。しかし、桜井米兵衛はその一人、岡本武右衛門を斬り倒した。岡本武右衛門の死は、荒木の刀が安物だったために起きたことになる。

そこに荒木又右衛門がもどり、戦鬪にふたたび加わり、2対2の戦いが繰り広げられた。しばらくして荒木又右衛門らが桜井米兵衛に深手を負わせた。桜井はその場で意識を失つた。もう一人は逃げたから、ここでの戦鬪はそれで終結した。虫の息をしていた米兵衛だったが、夕刻に息を引き取つた。

残るは、渡辺数馬と河井又五郎の対決だった。これが長引いた。双方へとへとなりながら奮戦し続けた。荒木が手助けすれば簡単だったかもしれないが、ここは敵討の形式として、一対一の勝負にこだわつた。見物人たちが多く集まつてきた。当局の役人たちも駆けつけた。

体のところどころに返り血を浴び、仁王立ちした荒木が叫ぶ、「おのおの方、待たれい！　これは敵討ちでござる。手出し無用！」

見物人の一人が、若い方の侍に声援を送つた。「若いのが、がんばれよ！　腰抜け侍をさっさとやっちまいな」

そばにいた男がすぐさま、たしなめた。「若い方が敵かたきだよ」

「ええっ？」

河井又五郎は背筋を伸ばし、隙を見せないように身構える。それに対し、渡辺数馬は息を切らし、へっぴり腰で刀を振り回す……。

衆人が環視する中で、見ようによつては、かなり無様な戦いが続けられた。

なぜ時間がかつたのかを考察すると、一つに、渡辺数馬の剣術が未熟だったことがあるが、主要な理由

として、河井又五郎に戦意がなかったからと考えるべきだろう。河井又五郎には渡辺数馬を討ち殺す動機がなかった。もう人を斬りたくないという思いがあったのかもしれない。

河井又五郎は渡辺数馬の胸に浅い切り傷を負わせただけで、それ以上は踏み込まなかった。

（剣術に弱い武士の一人を切ったとしても自慢にもならない。こいつには何の恨みもない。渡辺家の兄弟を二人も切ったとあつては、体面が悪すぎる……。打ち倒したりすると、荒木たちがうしろから斬りかかってきそうだし……）

河井又五郎は渡辺数馬が仇討をあきらめるのを待っていた、できれば引き分けにしたかった、と私は考える。

河井又五郎には、間合いを取っていれば、打ち込まれない自信があった。しかしながら、長時間の対決で動作が緩慢になっていた。伸ばしていた右腕に、渡辺数馬がたまたま踏み込んで振り下ろした刀が当たった。河井又五郎の右腕は、剣とともに切り落とされた。それで大勢が決した。

渡辺数馬も胸の二カ所に斬り傷を負っていたから、へたり込んでほとんど動けず、止めは、荒木の介助に

よって達成したとされる。6時間たつてようやく河井又五郎を討ち取った。苦難の末、みごとに本懐をとげたことになる。観客席の方から、拍手や歓声が上がったりして……。

河井又五郎一行は11人だったが、戦闘に関わったのは結局4、5人だけだった。その他は、町人、荷物運びの人足や馬の世話人だったわけで武士ではなかった。血闘中は、彼らは遠巻きに見ていたことになる。荒木又右衛門らに牽制され、渡辺数馬と河井又五郎の対決に手助けできなかった。

・その後の荒木又右衛門

荒木又右衛門は数馬とともに、事件を取調べた阿野津藩藤堂家に止め置かれ、謹慎生活を送った。その間、裁定すべき立場の幕府は、「身柄を預けた」の形で、処分を保留していた。襲撃した側を罰するべきところだろうけれど、少人数の者たちで敵討を成功させ、民衆から大いに喝采を受けているヒーローを厳罰に処するわけには行かなかったようだ。

4年後の1638年に、鳥取藩池田家（池田家は岡山藩から鞍替えになつていた）に強く求められて荒木の身柄を引き取られたが、直後に急死した。藩の記録では急病と記された。40歳だった。

その死因には諸説があるという。藩にとつては功勞者のはずの荒木又右衛門だったが、実質的に厄介者扱いされたのだと私は推測する。河井又五郎を討ったことで旗本側との確執が再燃するという恐れがあったから、という説がもつともらしい。

この敵討ちでは、池田藩が陰で操つてお膳立てをし、藤堂家の協力を得て実現したという陰謀も考えられるから、荒木はその事情をよく知る人物として、他言されないようにしたのかもしれない。「病死」なら、池田藩にとつて、あるいは幕府にとつても、禍根を残さない一つの決着になったのだろう。

なお、荒木又右衛門の妻と娘、および血闘で死亡した岡本武右衛門の子孫たちに対しては、藩が厚遇した。渡辺数馬についても優遇したが、その後、35歳の若さで死亡した。

*1参考資料：NHK歴史への招待12・血闘鍵屋の辻（初版発行昭和五十六年二月）

3 「時代小説」

元禄・柳の廊下

元禄14年（西暦1701年）、旧暦3月14日午前。

江戸城では三日間にわたる儀式の最終日を迎えていた。儀式を取り仕切っていたのは、高家筆頭の吉良上野介義央（六十歳、四千二百石、従四位上）であった。吉良は、知行こそ小さかったが、幕府の高級役人として、十万石の大名に匹敵する格式をもっていた。この年の正月、吉良自身が將軍徳川綱吉の名代として京都に出向き、朝廷に恒例の年賀の挨拶を行った。その年賀の返礼として朝廷から勅使と院使の一行がやってきていた。今回は特に綱吉の母、桂昌院に從一位を授ける式があった。それは、綱吉が強く望んでいたことが実現したものだだった。

勅使と院使の登城予定の二時間前に浅野内匠頭長矩（三十五歳、播磨赤穂藩主、五万石、従五位下）は、柳の間に詰めていた。勅使御馳走役として、大役を仰せ付かっていた。院使御馳走役の伊達左京亮村豊（伊予吉田藩主、三万石）と共に、綱吉による奉答の儀の開始を待っていた。じっと座っていると、体の

心まで冷え込んできた。正装していた浅野だったが、いつもより白帷子を一枚多く重ねていた。それでも寒さが身に沁み、体を硬くして耐えていた。

これまでの準備には、気を使った。勅使の気分を少しでも害さないための、物入りがあつた。浅野は十七歳のときにも馳走役を経験していたが、すべては吉良や高家の者たちに指図されるままに動いていた。今度も何をすべきかまるでわかっていなかった。吉良はそのときのことを憶えていた。吉良は、自分から動くことも、たずねようもしない浅野に「浅野殿は、もうご存知なのであろう」と皮肉を込めて言ったりした。常に伊達と浅野は比べられていた。伊達と自分との二人の扱いに明らかに差があつたと浅野は思っていた。吉良は伊達には親切に教えていた一方、浅野には見下したような物言いをしたと感じていた。吉良にはそれなりの心付けを送つたはずであつたのに。

式の間浅野は勅使たちと送迎時に挨拶を交わすだけで、ほとんど黙って座っていた。何もしないのに疲れることがある。正にそれであつた。少しの落ち度も許されない厳肅で、かつ、ばかばかしい儀式の中で、浅野の気持ちは安らぐことはなかった。特に主催者の第五代將軍徳川綱吉は、わがままで気が短い性格であ

つた。その言動はいつも浅野の気に障るものだった。浅野は御馳走役など二度も仰せ付けられたくなかつた。綱吉の気まぐれと意地の悪さで、決めたに相違なかつた。目の釣り上がった神経質な顔つきで、勝手気ままに天下のまつりごとを行う恐ろしい男であつた。浅野にとつて顔も見たくない男の一人だった。もう一人、トラの威を借る狐のような男……。

午前十一時ごろ、大広間で高家の梶川与惣兵衛は、吉良を探していた。使いの者に吉良を呼びに行かせたところだった。梶川は、これから儀式の行われる予定の白書院から足早に廊下を歩いてくる吉良の姿を見た。吉良は浅野がいる柳の間を通りすぎたところで、梶川と会つた。ところで、白書院と大広間との間の通路にはもう一本、中庭を挟んで松の廊下があつたが、松の廊下は儀礼用の特別通路であつたので、役人たちはもっぱら柳の間の廊下を通行に利用していた。双方が顔を合わせたところで立ち話を始めた。

吉良は梶川からの伝言を受け、急な問題が起きたのかと思つて足早に來たのであつた。しかし、勅使の到着が少し早まるのとこのことを聞き、少々安堵し、ニヤリと相好を崩した。

「今度の勅使殿は、気が短いお人だ……」

浅野は柳の間から二人を見ていた。浅野からは吉良の背が見えていた。二人は長年同じ役人であって、もちろん吉良の方が格上であったが、気が知れた仲であった。彼らは口の横に手のひらを立て、ひそひそ話をしていた。誰かの噂で嘲笑しているようであった。浅野は聞き耳を立てた。

「アサノは……気がおかしいのだと……」

吉良の声は小さかったが、そう聞きとれた。あの態度ではそう言ったに違いないのだ。

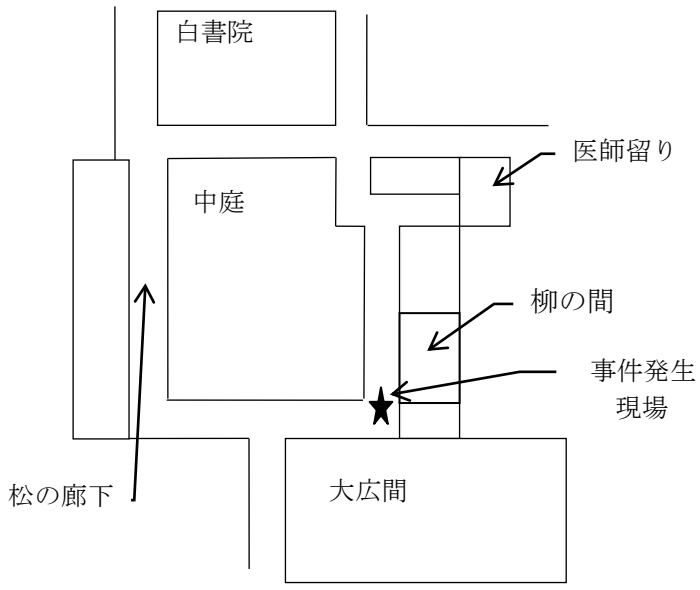
〈何と、吉良めが自分の陰口を叩いてあざ笑っている。しかも、自分が一番気にしていることを……〉

浅野の怒りが心頭に発した。

〈おのれ、上野介。旗本の分際で、大名のわしをコケにしよつたな。手打ちにしてくれよう〉

浅野は何としても吉良を痛めつけねばならなかった。腰に唯一の武器があった。浅野は立ち上がって小刀の柄に手をかけ、吉良の背中を直指して走り寄った。小刀を抜くや、力任せに背中を叩くように切りつけた。ドスツという大きな音が響いた。浅野の手には大きな手ごたえが感じられた。

こうして事件は「柳の廊下」で発生した。



吉良は突然背中を突かれる感覚と共に、鋭い痛みが走るのを感じた。のけぞり烏帽子を飛ばした。吉良が振り向いたとき、目の前に小刀を振りかぶる浅野がい

江戸城本丸 南部分

た。何がなんだかわからずにいると、次に、額に大きな衝撃を受けた。切りかかってくた浅野の刀をかわすこともできなかった。無防備な額を切られた。ここで吉良は、「殺される」と思った。肉食獣に襲われるような恐怖を感じた。額を抑えながら、後ずさりした。ともかくこの場を逃れようと思った。

なおも切りつけようとする浅野を、とっさに梶川が回り込んで、小刀の柄を掴みながら押さえ込んだ。間もなく大広間にいたものたちも、この騒ぎを聞きつけ、数人がかりで浅野を取り押さえた。

柳の間へ引き立てられていくとき、浅野はまだ興奮して、「やった、やった、吉良をたたき切ってやった、いいきみだ」などと叫んでいた。が、ひとりの旗本に、「もう済んだことだ、もうよいではないか」とたしなめられてから、ようやくおとなしくなった。

一方の吉良はおびたらしい出血とショックで気を失ってうつむきに倒れてしまった。吉良は檜の間で治療を受けた。上等な布着で覆われていたためか、背中の傷はたいしたことなかったが、額の傷が深手だった。出血が止まらなかった。江戸城に詰めていた二人の医師、内科医と外科医の手には負えなかった。相談の結果、高家の一人が、神田明神下に往診に行ってい

た名医の誉れ高い栗崎道有くりさきどうゆうを呼び寄せることにした。

神田から栗崎が急いで来てみると、吉良の額からまだ血が流れ出ていた。貧血のためか、吉良は生あくびを繰り返して、ぐったりしていた。額の傷は骨にまで達していた。傷の長さは三寸五、六分(約10.5センチ)。六針縫った。背中の傷は比較的浅かった。それでも三針縫った。朝から何も食べていなかった吉良は、医師の勧めで食べたおかげでようやく元気を取り戻した。事件の調査のためにやってきた目付けの質問にも受け答えができるようになった。吉良は栗崎の適切な手当てに大いに感謝した。後に、翌年の12月になって栗崎は、切り離された吉良の首と胴体を縫い合わせることになる。

事件が起きたころ、綱吉は暖かい風呂に入っていた。式に際して身を清めるための行水であった。風呂から上がって着替えたところで、刃傷事件の顛末を聞かされた。御用人の柳沢吉保が綱吉に事件のあらましを報告した。

「何と、馳走役の浅野が、立ち話をしていた高家筆頭の吉良をいきなり後ろから切りつけたというのか。卑怯なやつじゃ。位階も吉良の方が上であるうが。浅野

は上位の者にたてついたのでか。それに、守り刀である小刀を抜いて打ちかかるとは、はなはだしい誤用じゃ。城内で刀を抜いてはならんことも知らんのか。大事な儀式のときに、役目もわきまえず、刃傷に及ぶとは不届き千万。今からの儀式に代役を考えねばなるまい。吉良の代わりに誰が務まるか。ともかく、浅野は役から下ろせ、謹慎させろ」

苦にがりきつた綱吉は、はき捨てるよう言った。そして柳沢に理由を問うた。

「ナニ、浅野は切りつけた理由を言わない？ 理由もなしに切りつけたのか。たわけ者めが。梶川が止めに入らねば、吉良は死んだやも知れぬ。理由もなしに殺されたとあつては、死んでも死に切れんじやたことだろう。もうよい、理由は聞かんでもよい。浅野を厳罰に処せ」

吉良にも、これといった理由は思い浮かばなかった。命を狙われるような覚えはまったくなかった。瞬間的に見た細面の浅野の顔を思い出した。あれは正気顔ではなかった。逆上した男の顔であった。

「逆上した男に正当な理由などあるはずがない。確かに浅野に、気に障るような、いやみの一つ二つは過去

に言ったかも知れぬ。が、それは職務として言ったまでのこと。もう何十年も他の者にも同じように言ってきたのじゃ。浅野ひとりには恨まれる筋合いはない。このわしに何の非があるというのじゃ」

恐怖から醒めた吉良は、浅野の理不尽な振る舞いに少々怒りを覚えていた。

幕府は、綱吉の強い意向で浅野に対して即日切腹、赤穂藩お家断絶を、すばやく決めた。それに対して、吉良には綱吉からの、養生せよとのお言葉を伝え、止めに入った梶川には褒賞を与えた。

浅野は、目付けたちによる取調べの後、大罪人扱いで、錠が下ろされ、網に覆われた駕籠かごに乗せられて江戸城から田村家の下屋敷に護送された。そこにはもう意気消沈し、憔悴せうせいしきつた浅野の姿があった。浅野は、白装束で寒さに震えながら、途切れ途切れに述懐していた――

「取り返しつかないことをしてしまいました。後先を見ずに、わしは何とということをしてしまったのだ。嗚呼ああ、とんでもないことをしてしまいましたものだ。わしとしたことが、身の破滅をまねいてしまうとは……」

「あのとき、吉良殿は何と申したのだろう。確か、吉良殿は自分を嘲あざけることをひそひそと申していたのだ。

しかし、何と申して嘲ったのか、その声を思い出せぬ。自分の聞き違いであつたかも知れぬ。そうであつても、聞き違いで人を切つたなどと誰が言えようか。本当に嘲つたのならば、梶川殿が証言するはずだ。わしはもはや言い訳するまい」

「上様の沙汰は、切腹お家御取り潰しか。わしは潔く上様の沙汰に従おう。家臣たちには、もう合わす顔がない。これから家臣の者どもはどうなるのだろう。もう太平の世の中だ。武士が刀を振り回す時代ではなからう。転業のいい機会ではないか。それに、我が赤穂藩の財政は石高以上に豊かだ。蓄えもある。家老の大石は人望のある、しつかりした男だから、家臣たちをよく導くだろう。藩の財を一人で使い込んだりしないだろうから、家臣たちが路頭に迷うようなことにはなるまい」

「吉良殿は命に別状なさそうだという。吉良殿にはまことにすまないことをした。嘲つたことが本当だとしても、嘲られたぐらいで切りつけたわしが悪い。学識経験豊かな吉良殿から見れば、わしなど、礼儀作法の知らない田舎の殿様に過ぎないだろう。わしが吉良殿を殺してしまつたら、それこそ吉良家や上杉家のものが黙つてしまい。吉良殿はご老体だ。あの傷が

元で大事にいたらなければよいが……。せいぜい養生して長生きしてください。わしは腹を切つてお詫びをする」

「この田村殿の庭先もわしの血で汚してしまふのか。みなに迷惑をかけつばなしだ。寒い夜だ。あの世は暖かいだろうか」

幕府の切腹お家御取り潰しの沙汰に不満をもつたのは、赤穂の家臣たちと江戸の町民たちであつた。厳罰に処された赤穂の家臣たちは、このまま吉良に何のお咎めもないのなら、赤穂の末代までの恥、と考えた。

一方的に赤穂に不名誉だけが残ることに我慢がならなかつた。武士の面目が立たなかつた。被害者の吉良を悪者にしなければ、『不公平』であつた。喧嘩両成敗でなければならなかつた。そして、藩主たる者が我を忘れて刃傷に及んだことに、もつともらしい理由がなければならなかつた。江戸の町民たちは想像をたくましくして噂し合つた。中には、浅野の肩をもつあまりに、止めに入った梶川に対し、余計なことをしたものだと言はれる始末であつた。

幕府が咎めないのなら、自分たちが咎めに行く。赤穂浪士たちは主君の恨みを晴らすことを大義名分とし

て、主君が殺しそこなつた吉良を討ちに行く。

浪士たちは思う、「吉良に愚弄されたにちがいない主君は、無念の切腹をしたんだ。吉良が何の咎めもなく、のうのうと生きているのは、一方的なえこひいきによる、不当なことだ」

「主君が切腹させられ、我らが浪士となつたのは、すべてあいつのせいだ。あいつを討たなければ、浅野家臣下の名折れだろう。このまま何もせず屈辱に甘んじては、末代の恥になることだ。あいつは主君の敵だ。江戸に行き、やっちまえ！ 吉良の首を上げろ！」

「我らがこれを達成すれば。忠義の志士として褒め称えられるだろう。我らを取り立ててくれる藩があるかもしれない。めでたく、再び藩士への道も開かれるというものだ」

集結した47人の武装集団は、元禄15年12月14日（1703年1月30日）寝静まつた深夜に、足早に裏道を通り抜け、江戸本所松坂町の吉良邸を襲撃した。

彼らは、江戸庶民の評価はともかく、幕府によって全員切腹という極刑に処されようとは思ひもよらない人たちだった。